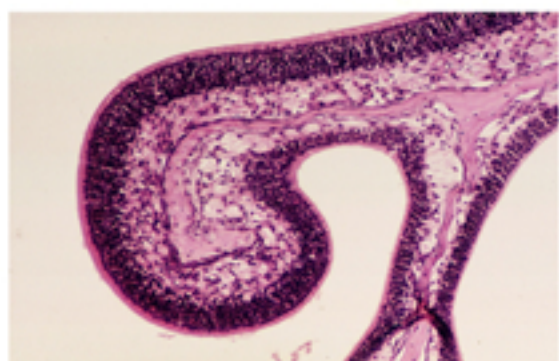


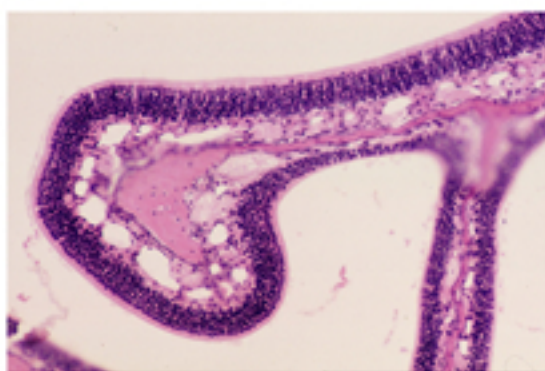
■バニラ

バニラはお菓子に甘い芳香をつける香料のことで、メキシコ原産でラン科の「バニラ豆」の香りである。

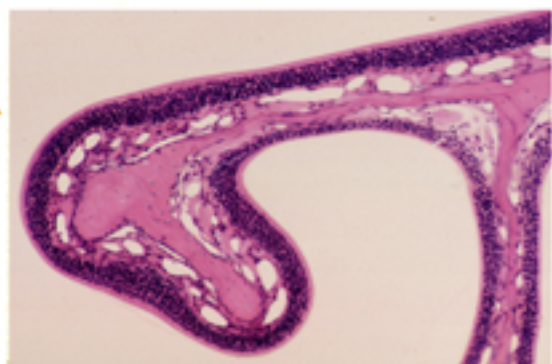
■老化促進モデルマウス (SAM-P1) の増齢による嗅粘膜の変化



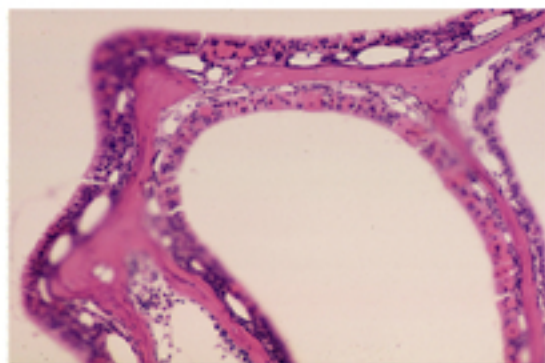
① 5週齢のマウス



② 10週齢のマウス



③ 25週齢のマウス

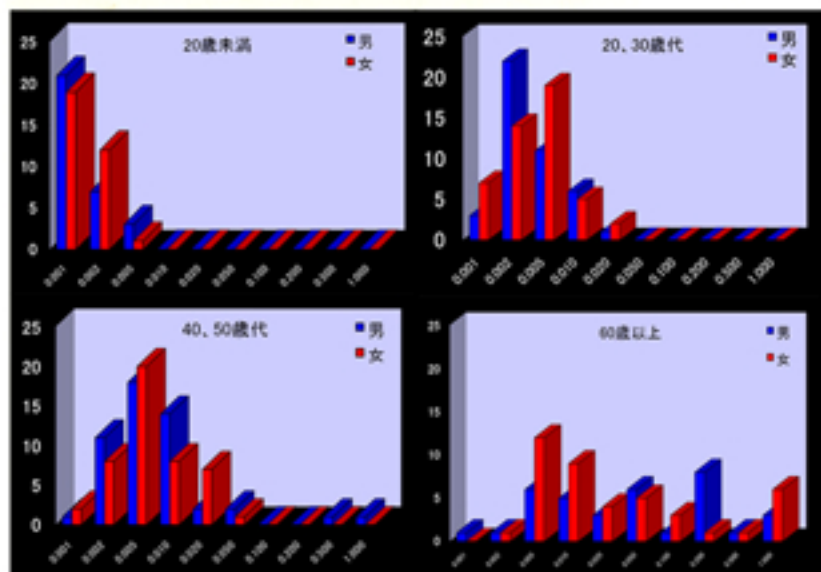


④ 50週齢のマウス

写真は生後5週目から、50週目までのマウスの鼻腔内の断面写真。5週齢のマウスでは嗅細胞の数も多く、嗅粘膜も厚いが、ほぼ寿命に達した50週齢のマウスでは嗅細胞の数も減り、嗅粘膜も薄くなっている。増齢による嗅覚の減退は明らかである。なお老化促進モデルマウスとは、寿命が1年程に短く改良された実験用マウスのこと。普通のマウスは、平均3年程生きる。

■バニラ臭を使ったヒトの増齢にともなう嗅覚能力比較

各グラフは、年代別に行った官能テストの結果をグラフにしたもので、初めてにおいを感じた濃度別の人数を表している（縦軸が被験者の数、横軸がバニラの濃度）。若年になるほど濃度が薄い左側にピークがあることがわかる。60歳以上の層では、ほとんどピークは見られず、全体的に散らばった印象を受ける。



今回の測定は、正常健康な非喫煙者の男女328人に対して実施した。低い濃度のバニラ臭から順次、約1～2分感覚で嗅いでもらい、においが分かった時点その閾値とした。

未熟なサヤを乾燥させたものをバニラビーンズと呼ぶ。香りの主成分をアルコールに溶かしたものがバニラエッセンスで、飲み物や冷菓などに使われる。バニラオイルは油に溶かしたもので、焼き菓子などに使う。

このバニラは、老化によって極端に感じられなくなる香りである。普通、六〇歳を過ぎれば多くの人に嗅覚の低下が現れる。バニラのおいしさは、とくにその低下が著しいものとして知られる。

前ページの写真は、ラットの各年齢の嗅粘膜の断面図である。年齢が高くなるにつれ、嗅粘膜が薄くなっているのがわかる。人間でも同じように薄くなるのである。また左のグラフは、バニラの官能テストを人に行った結果である。

若者が濃度が薄いうちにおいを感じているのに対し、六〇歳以上の人では、濃度が高くなると感知できない人が増え、全体にはばらつきが大きくなっている。年輩の人でも濃度が薄いバニラを感知できた人は、おおむねスポーツなどを趣味とするアクティブな人が多かったことを指摘しておこう。

最近、歳をとったと感じる人は、一度バニラの香りを薄めて嗅いでみてはいかがだろうか。まだまだ自分も捨てたものじゃないと自信が持てるかも知れない。